

寺院を伝道の拠点とするために

新聞 智 照

本論では、「寺」「寺院」という語で、教団の組織施設の単位である寺院・教会・結社を包括して表すことにする。

も っ と 〈寺院論〉を

いったい「寺」とは何なのか。何をするとところなのか。本宗の寺院であれば

「日蓮聖人の教えを宣べ伝える伝道の拠点である」

と説明が返ってこよう。しかし現実の寺院の姿は、そんなに単純明快ではない。あいまいで、多様で、何を本質としているのか、もやもやとわからないようなところがある。

わたくしたちは教義・教学を論じたり、教団論や教師論に熱中したりするわりには、〈寺〉という単位組織施設に焦点を合わせて分析のメスを入れてみることは、あんがい盲点になっている。

「伝道教団をめざして」という場合、その問題意識は、

〈教団全体〉の姿勢の問題であり、あるいは、現在現実の寺院をあらかじめ前提して、その機構の中で〈教師各自〉がどう努力するかの問題として考えられている。現在の〈寺〉という単位が、その「伝道教団へ」という目的にそぐうのか、そぐわないのか、あまり反省されていない。

だから、あるときは、単位寺院の護持会組織とびこして（というより避けて通って）、「護法会」を別に作るという構想が発想されるのであり、それにたいする揺り返しが行われたあとは、ともかく既存の寺院そのままに「統一信行」の実施を要請し、すぐに実施に発動した寺院は僅少でしかなかったという現状を、わたくしたちは目の前に見ているのである。

教団全体の問題と、教師のありかたの問題の接点である

単個寺院のありかたが、もっと問題にされるべきであると思ふ。

寺院住職であることのいらだたしさ

わたくしは都会の中規模の寺院で二十年来、専業住職をつとめて来たが、このごろでは、いっそ住職を退きたいほどの気持ちを抱いている。

自行化他の宗教活動を、ほんとうにのびのびと行うのは、 \wedge 住職 \vee という固着的な役職の束縛から離れて、もっと自由個人的に、もっと専門職的に、自主独立を確保したい。あるいは、はじめから明確に限られた目的をもつ柔軟な組織のオルガナイザーになりたい。いわば自分の本当の任務をもっとはっきりさせて、集中したのである。現在の寺院というところは、求道または伝道を志す教師にとって、なま殺しのような環境条件ではないだろうか。

(ナントイウゼイタクナナヤミダ——ト、アナタハソウオッシャリタイデシヨウカ)

わたくしは数年前より、教化研究会議その他で、「寺院の協同化・組織化」「教化センターの設置」などの主張を発表してきたが、それというの、単個寺院の脱皮の困難さ、現実の無力さが身にしみており、打開の一方向として問題提起であった。

しかし、つけ加えるなら、 \wedge 協同化 \vee ということは、協

同して一つの単位となり拠点となるということで、問題の本質は、じつは単一寺院と同じである。逆にいえば、単一寺院でも、その一ヶ寺の内部で同志を集め協同化をなしとげ、教化センター化することができれば、それで申しぶんないわけである。

だが、そういうことの実現のしにくさ、その方向へのスタートさへしにくいのは、 \wedge 寺 \vee というものの解釈が、あまりにまちまちであり、ぼやけているからである。

\langle 寺 \rangle とは——世間のえがくイメージ

\wedge 寺 \vee とは何か。信徒をふくむ一般世間人は、どういうイメージを持つであろうか。

○「寺とは教団の支店だろう。本山(本部・本院)の指示に従って活動しているのだろう。だが直営でもなさそうだ。独立採算制かな」

○「寺とは住職一家の自家営業だろう。自家用堂を構えて法要・説教なんでもしているのだ」

○「寺というのは神社と同じで、おまいりするためのお堂だろう。信仰のある人がだれでも自由におまいりし、お経もあげてもらえる。当然、管理人や専従者がいるわけだ」

○「寺というのは一定の檀信徒の信仰クラブみたいなものだろう。特定の何十軒か何百軒の家が、自分たちの先祖

まつりや信仰のために寺を持ち、専従僧に管理を委せているのだ」

思いつくままに書いたが、こんなところであろう。一般世間といわず檀信徒でさえ、こういう思いの解釈で、それぞれの欲求を寺に向けてくる。現場の寺院教師は、多分にそれに拘束され、いやおうなしに檀信徒志向的に、その個別の欲求を消化するのに精いっぱい、とても、体系だった本来的な伝道の姿勢をとれない現状のように見受けられる。

原点にかえるときがきている

がんらい、宗教はその原点において、寺院教会などの施設もなく、教団組織もなかった。あるものは、個人の△宗教体験▽と、その体験情報を△伝達する行為▽だけであった。それが長い発展の歴史の中で、教団ができ、堂塔が建てられ、伝道のさまざまな方便がとられてきた。

現在の中小寺院になると、設備面では本堂・客殿・庫裡などが三点セットのように規格化し（しかも住職一家の住宅の比重が大きくなり）、組織面でも住職・ごく少数の弟子職員・数十〜数百軒の檀信徒がワンセットとして規格化し、活動面でも、葬祭の一連の法要などが規格セット化して、△伝道▽といっても、これらの規格セットを通じての細々としたものに過ぎない。△高次の宗教体験とその伝

道▽という原点から眺めるとき、現状の寺院とその活動は、かなり異質化し動脈硬化をおこしているといわざるを得ない。

もつともわたくしは、現代においては寺の活動業務は多様化し異質なものにまで展開されてもいいと思っている。しかし、その多様さの中で、何が本来的で何が伝道として優先するののか、という秩序づけと、どういう意味で寺はその仕事をするののか、という意味づけの自覚が伴わなければならぬと思う。

ただもう大きいお堂を建てることを目ざす伽藍主義

ただもう信徒が増えればよいと考える員数主義

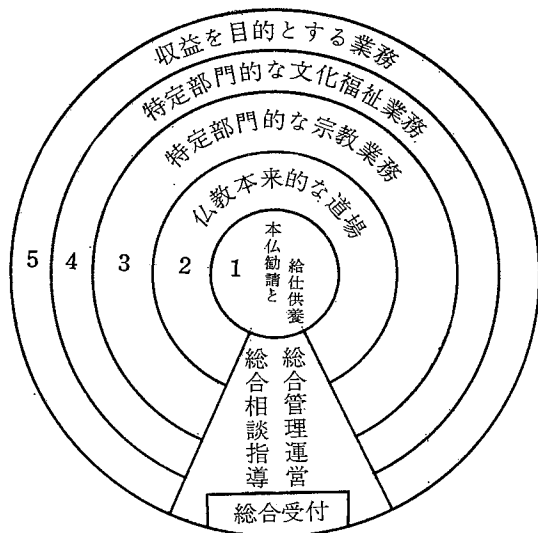
ただもう事業を盛んにすることに熱中する経営主義

そういう繁栄主義の仇花の時代は終ったと、わたくしは感じている。某教団の大本堂建立をはじめ、各教団の活動の多くの部分が、わたくしには「六日のあやめ十日の菊」と感じられてならない。

世界全体に新しい宗教活動が起りつつあるのだ。それらの多くがまた既成化しマンネリ化の道をたどることは目に見えているけれども、地球的危機の深まりゆく現時点において、人々はより実質的に、より本来的な宗教情報を求め出しているようである。

わたくしたちの寺も、なんとかしなくては……

寺の業務の秩序づけ



第1図 寺の活動業務

△寺のするべき仕事▽を、わたくしは第一図のように同心円的に秩序づけてイメージしている。一つの寺が住職の特技や立地条件や由緒伝統によって、たとえば祈禱寺とか幼稚園経営とか、何かの特色を打ち出す場合にも、教団の伝道単位施設としての規準業務を念頭に置いたうえで、分科分業的な役割を果たすべきなのはいうまでもない。しかし現在の寺院では、教師も信徒も、「葬儀」と「先祖回

向」を第一次の業務だと感覚している人が圧倒的に多いのではないか。それらの法要は、じつは第三次的な業務なのだという認識をはっきり持たなければ、△寺を拠点として伝道をどう進めるか▽ということは出てこないと思う。すこし説明を加えよう。

第一次業務 本仏の来臨影現を請い給仕供養する

寺という施設空間である以上、在世の釈尊に代わる本仏顕現の靈妙な空間を、寺の中心に顕在させねばならない。その本尊空間の発振する靈妙な情報（本仏の常説法といってもいいだろう）の発現を失わないために、法味を中心とする給仕供養が常時なされるべきであることは、言うまでもあるまい。

この場合、一つの問題提起をすれば、給仕供養が住職と寺族のみに委託されているかのごとき現状は問題である。寺の護持集団（いわゆる檀信徒全部がこれに当るとは限らない）の輪番的な責務であると考える。

第二次業務 仏教本来的な道場の運営

釈尊の教団がそうであったように、宗祖のもとに集る信徒集団がそうであったように、自覚的に聞法・求法・信行を志す人のためにこそ、寺はある。この機能がはたらかずに、第三次以下の個別業務が盛んな寺は、いかにも職業じみてくる。現在の大多数の寺は、一口にはいえない、いろいろな条件の重りで、心ならずも（または気もつかず）こ

の本来的な道場業務をおとろえさせてしまっている。

主な理由の一つは、経済事情からむ／＼スタッフの不
足／＼であろう。法要と雑務で手いっぱい、月一回の法座
をもつのが精いっぱいという寺が多い。「まあまあやって
行ける」という現状満足を捨て、何らかの方法で収入を
倍にし、専従職員を倍にして、やっと必要な伝道教化の力
が発揮できるのではないかと、わたくしは思っている。

もう一つの理由は、既存のいわゆる／＼檀信徒／＼にとらわ
れ過ぎていることだと思ふ。先祖まつりを主目的で寺に属
して来た人、祈禱を受けに来た人、それらの／＼縁／＼とい
うものは非常に大切ではあるけれど、／＼縁／＼にとらわれすぎ
て、社会にたいし閉鎖的な／＼檀信徒／＼集団のみを意識し、
求める気運のあろろがなからろろが、まずこの檀信徒を教化
しようという努力は、かなり効率の悪いものではないだろ
うか。そのあげくに「信行会には人が集りにくい」とこぼ
すことになるのだけれど、発想が逆なのではないかと、さ
いきん感じ出している。／＼いわゆる信者／＼を教化すること
が伝道の幹線コースなのでなく、広く社会にたいしてオー
プンな求道道場の態勢をととのえ、求めて来るものを教化
して／＼ほんとうの信行者／＼を生み出してゆくことが本来の
伝道であろうと思ふ。／＼檀信徒／＼の名のもとに、寺に有縁
のものを一括して伝道対象と考えやすいけれど、各自の求
めるレベルに応じての伝道姿勢であつてよいのであり、幾

段階もの組織であつてよいと思ふ。

／＼道場／＼としてのシステムはいろんなコースがある。

1、専属者のいる修行所・研究所などの設置（最小の場
合は住職一人の修行・研学システム）。

2、定期的な講座や研修会のシステム。

3、臨時の講演会や研修会のシステム。

4、個人が随時に利用できる行学のシステム。

これらのことが／＼寺の本職／＼と感じられるほど盛んに行
われる方向へ、寺の運営を考えて行きたいものである。

第三次業務 特定部門的な宗教業務

世間が一般に「お寺さんの本業」と思っている法要儀式
執行その他で、寺の仕事の大きな部分をなしていることは
申すまでもない。葬儀・追善供養・納骨牌の祠堂管理・結
婚式等各種儀式・別願祈禱など、特定の部分的な希望に応
えての宗教業務であり、伝道場として生かすことに異論
はない。

第四次業務 特定部門的な文化福祉活動

宗教教団は原点においては、単純直接な第一・二次業務
を行っていたのであるが、長い歴史の中で、大きな文化の
発達をうながし、社会とも密接に結びついて来た。広く人
間の向上や救済に役立つ仕事は、やはり成仏への第一歩の
意味も持ち得ると思ふ。第一・二次の求心的というか専修
的な任務を見失わない限り、「一寺院一社会事業」といわ

れるような特定の文化事業・福祉事業を寺が行うことは、むろん望ましいことである。

ただし、最近はかなり官公私立各種の文化福祉事業や施設が増えて来ているので、寺で営む場合は、

①さすがに寺だ、というほどの仏教精神の裏づけとか心柱が通った内容、又は運営法。

②社会の要求に立って、不足気味のものを補う。という方向で考える必要がある。

第五次業務 収益を目的とする業務

もちろん第二〜四次の業務にも収益を伴うし、厳密には分けられない。便宜上いちおうの区別である。教化にあまり関係なく、社会への貢献度も低い、しかしその収益を伝道活動に廻せる（場合によっては間接に）場合、営んでもよい。ただし、マイナス面にくれぐれも気をつけないと、かえって寺の仕事の邪魔になったり、寺のイメージダウンになったりする。

別別次業務 総合運営（受付・相談指導・管理事務）

以上の第一〜五次業務が、バラバラの寄せ集めでなく、寺全体が有機体としてはたらくためには、寺の総合本部として全体の調整の仕事がある。大寺院になるほど、この部分の良否が活動の鍵となるし、小寺院の場合は、たとえば何ヶ寺か集って分業的に業務を分担し、グループとして一つの伝道集団になる場合のことを想像してくだされば、や

はりこの重要さがわかりただけよう。

伝道は本来、かなり個人的な行為なので、組織の運営はおろそかにされて来た面が多い。教師個人がアパートに住み、単独に伝道活動をするのならともかく、〈寺〉という施設・組織を単位としての伝道を考えるうえで、この頭脳中枢的な業務に行きとどいたシステムを考えなければ、せっかくの寺が生きないであろう。

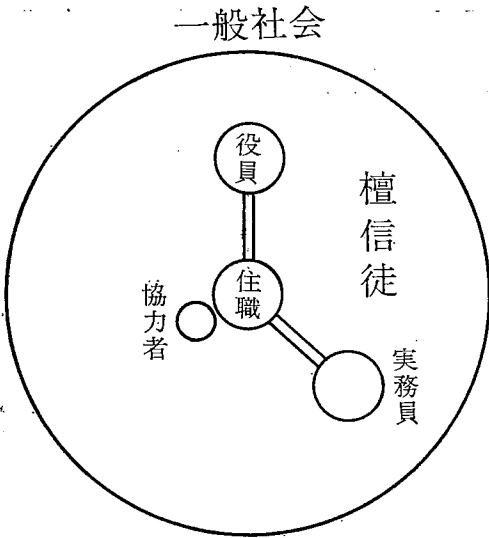
〈寺〉の観念の組み直し

わたくし自身が実験の成果どころか、まだ実施にもかかってないことばかりであるが、ここ数年、心の中では従来への疑問と、その在り方への分析をつづけて来たのでその一端を記したわけである。

△伝道宗門△へ脱皮するためには、△寺院を伝道の拠点とする△ためには、いままでの△寺△の固定観念を一度分解し、あらためて組み直す必要があると思う。先にも述べたように、施設・組織・業務の規格化された観念を破り、

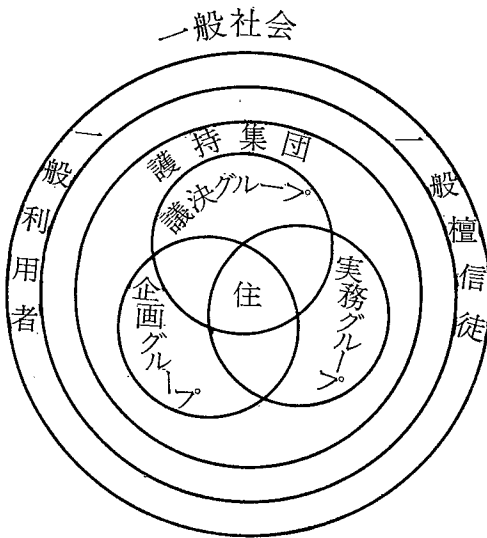
①まず寺のしなければならぬ仕事の種類とその位置づけを定める。わたくしの場合、前記の同心円秩序であり、その各項に具体的な細目を立ててみる。

②施設としては、本堂・客殿・庫裡というプランニングを前提するのではなく、活動の項目から必要設備を考え、それのまとめ方を考える。△業務別空間の位相



第 3 図

図Ⅴの一例が第2図である。(7頁参照)
 ③組織としては、第3図のような旧来の型——住職とその腹心協力者(場合により妻であったり、嗣子であったり、執事であったりする)が運営のほとんど全部を持ち、役員は少し距離を置いてあまり干渉しない。その他の実務担当の役員・弟子・寺族は相談にあまりあずかれない——という個人経営型より転じて、第



第 4 図

4図のように、住職はシンボリックな中心であり(もちろん他の役割を兼ねても差支えない)、それを囲んで調査企画のグループと、討議決定のグループと、専門実務のグループがかなり重なり合って緊密に結ばれ、その外辺へ二〜三段階の護持集團・檀信徒・寺の一般利用者・一般社会が広がってゆくという形をめざしている。

めざすばかりで、足はなかなか動かない「いらだち」は前に記したが、まずは既成の枠の中で、△統一信行▽を二回目、三十時間コースで実施するなど、現状の方からの伝道拠点化も進めてはいる。

本号特集の意図に少しはずれたかも知れないが、△寺▽を論ずることの一石になれば幸いである。△寺院の協同化▽△教化センター▽の場合も、同じ問題点で、この延長上に考えていただければよい。

